寺報みょうとく

題字 松川裕子

浄土真宗本願寺派妙徳寺
（安芸教区志和組）
発行責任 寺報編集委員会
東広島市八本松町飯田六〇二
電話〇八二-四二八-〇一四四

寺院活動のための 新型コロナウイルス感染症拡大防止の方針

安芸教区志和組13ヵ寺

<趣旨>

現在、地域の様々な活動・行事が、また本山別院・各寺の法座や行事も自粛あるいは短縮や中止などの判断をとっております。（中略）

今後私たちの法座の機会を守り寺院活動を消極的なものにしないために志和組法中で協議、感染防止対策をとりながらより安全な法座を開催することを目的として、あらためて次の5点を志和組法中の方針として申し合わせることとしました。

<志和組法中としての方針>

[1] 手指の消毒設備の設置、マスクの着用依頼、室内の換気、飲食提供に対する配慮等、適切な感染防止対策を講じること

[2] 3密(密閉・密集・密接)の状態にならないよう互いに配慮を心がけること

[3] 大声での発声、歌唱とならないように配慮し、又は近接した距離での会話等を控えるように呼び掛けること

[4] 参拝くださる方には事前の検温をお願いし、37.5℃以上ある場合は参拝を控えていただくようお願いすること

[5] 相手の痛みを知る仏教徒として、感染者・医療福祉関係者やその家族などを誹謗・中傷・差別になる言動を厳に慎むこと

報恩講へのお参り ありがとうございました

あけましておめでとうございます

まだ不安なことが続きますが、いかがお過ごしでしょうか。本年も皆さまのご健勝を念じております。

十一月二十五日に当寺の報恩講をお勤めいたしました。昨年に引き続いて感染症拡大防止に配慮して午後一時からの一座のみ、短時間開催としました。お斎（会食のこと）はなく、代わりの記念品としてちょっぴり高価なハンカチを用意しました。これからも手洗いを心がけましょう。

この度の法座には広島市東区の樽谷和幸師に高座説教をお願いしました。当寺では三年ぶりに高座を据えて節談の語りでお説教を聞かせていただきました。

戦前までのお説教と言えばこの高座で行われる節談説教だったそうで、江戸時代に浪曲や落語などのもとになったと言われます。

講師は黒衣に五条袈裟という僧侶の正装で高座に座り時折節回しを付けた語り口で行うお説教。戦後は高座は用いず立ったままの簡易的な形で、仏教用語を板書しながら現在の法座に移行しました。

ご講師の節談の語り口にあわせるようにお念仏で応えるお同行。浄土真宗の何百年もの法座の景色と先人の姿を見るようで、「あゝ、こうした歴史を重ねて私までお念仏をつないでくださったのだなぁ」としみじみとお念仏申しました。

護持会報告

なかなかお集まりいただくことができなかったため、延期しておりました護持会報告会を、報恩講終了後に行いました。

同時に令和四年度会費納入もお願いいたしました。お越し頂けなかった皆さまには報告資料と会費納入願いを郵送いたしました。

引き続きご協力いただきますようお願い申し上げます。

一語法話

『正信偈の十二光』

阿弥陀仏はすべての人を救うためにどのような仏になられたのか？親鸞さまはその働きを『正信偈』で十二の光とお教えくださいます。今回は九番目の光「不断光」についてです。どのようなお働きなのか、親鸞さまのご和讃を通して味わってみます。

⑨不断光

「光明照らして絶えざれば
不断光仏と名けたり
聞光力の故なれば
心不断にて往生す」

阿弥陀仏は「聞光力」を備えているから「不断光仏」なのだとおしゃいます。

「聞光力」について、親鸞さまは他のところで「聞くといふはこの法を聞きて信じて常に絶えぬ心なり」、また「きくといふは、本願をききて疑ふこころなきを『聞』といふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり」と示されています。さらに「聞といふは、衆生、仏願の生起本末を聞き、疑心あることなし、これを聞といふなり」とも著され、阿弥陀さまの誓願を聞いて聞いて聞き抜いて、疑う心がなくなるのが「聞」、疑う心がないのが信心だといわれます。

聞くとは自らの行為であって、「香を聞く」や「聞き酒」など、自分の感覚によって丁寧に受け止めようとする意味もあります。しかし自分自身で丁寧に仏の教えを受け止めようとしても、納得し疑わない心へとはなかなか至ることはできません。それは聞いている自分にまことを受け取る力がないからです。阿弥陀さまはまことですから、本来阿弥陀の誓願を聞かせていただくことでそのまま信心いただくことになるはずですが、聞く側にまことを受け止める力がないために信心に至ることができないのです。

疑う心がなくなるまで聞かせていただくということは、「いつまでもある」、「どこまでも変わらない」、「絶えることはない」という妄想から私自身が解放されることです。そして刻々

（次頁へ続く）

私のヘウレーカ

いろいろな場面で「わかったぞ」と感じられたことがおありと思います。このような皆さまのご経験を「ヘウレーカ（そうか！）」と題して掲載しています。仏教や浄土真宗に関することでなくても構いません。皆様方からの投稿をお待ちします。

今回は仏壮会員の玉田さんに寄稿していただきました。

お阿弥陀様は何を食べておられるのか？

問：私達は食事をして栄養を取らなければ死んでしまいます。

阿弥陀如来は死仏ではなく、今現在も説法をしておられる活き仏です。しかも間断なく我々凡夫を『必ず救う、我に任せよ』と働き続けておられます。ならば、何を食して栄養にしておいでなのでしょうか？

答：仏様は食物を食べる必要のない世界に住んでおられます。大無量寿経には『食ありといえども、実は食するに非ず、ただ色を見、香を聞きて意を以て食とすれば自然に飽足す』と説かれています。食べずして満腹する、まことに世話のないのが仏のお身体であります。したがって生活苦もなく、食糧問題もありません。

浄土論には『仏法味を愛楽して、禅三昧を食す』と説かれ、『宝積経』には『阿弥陀仏は法喜を以て食す』と示されてあります。

（玉田義幸）

（『真宗仏事の解説』から一部引用）

行事予定

新型コロナウイルス感染リスク軽減を目的に法座回数を当面減らすこととしています。ご注意ください。

大晦日　午後十一時半より
除夜会（じょやえ）

元旦　午前十時より一時間半
修正会（しゅうしょうえ）

一月十一日（火）午後一時
御正忌法要（おたんや）
講師　八本松町篠　本派布教使　岡本 法治 師

三月十日（木）午後一時
春彼岸会（はるひがんえ）
講師　当寺住職 自勤

（前頁からの続き）

とわが身、わが心が変わりゆこうとも「大丈夫」と常に引き受けてくださっている阿弥陀さまのはたらきがあるという、変わらないことにであい、うなずいていくことでもあります。

「心不断」について、親鸞さまは「弥陀の誓願を信ずる心絶えずして往生すとなり」、また別のところでは「菩提心の絶えぬにより不断という」とお示しであります。私には信ずる心を常に保ち続けることは困難だけれども、阿弥陀さまからいただいたこころだから絶えない、断たれることはないのです。

疑う心がなくなるまで聞き続けることは、まことがない私であるために願いを深くせずにおれぬ弥陀のおこころにうなずいていくこと、そしてこの聞による信とは実は私の行いではなく、阿弥陀の側から絶え間ないはたらき（不断光）によるからなのだよ、と親鸞さまはお教えくださるのです。

（次号へ続く）

『藝州賀茂郡飯田村 獨歩行』

竹本 省三

其の九 「初見された飯田村」

「古文書」は過去・現在・未来を繋ぐ財産ですが、学習機会に恵まれません。最近ではインターネットや書籍類で情報が容易に手に入るので、典拠の真相に気付かず鵜呑みする傾向が見受けられます。

つまりネット上の内容は根拠の乏しいものが散見されます。

今回は飯田村が古文書に初めて登場したものを紹介し具に読んでみましょう。

❶【右田毛利家文書】
山口県文書館所蔵

大内政弘預ケ状
安芸国東西条内飯田村百貫地弘顕跡事、預進之候、任先例可被全御知行候、恐々謹言
六月十九日　政弘（花押）
天野讃岐守（弘氏）殿

【解説】この文書には年数がありませんが、花押から文明元～三年（一四七〇）頃のものと推定されます。大内政弘が弘顕に知行していた飯田村百貫を天野弘氏に預けたという簡単な内容ですが、預け替えした理由と弘顕の氏姓も書かれていません。「顕」は天野家一統の氏姓で「南北朝の騒乱」で足利尊氏と拮抗した新田義貞が仕えた公卿・北畠顕家の偏諱と想定され、後醍醐天皇側の南朝派と考えてもいいでしょう。義貞は河内源氏を祖とし、足利尊氏と同門ですが、両雄並び立たずといったところで敗者となりました。「志和町史」には典拠不明ですが義貞の孫を天野氏が養育したと書かれています。

内容を更に繙いてみると、先ず飯田村の耕地面積が概ね予測できます。一反に八斗～一石が当時の出石高として、十二町歩前後の田地が拓かれていたことが分かります。現在の面積の一割弱です。飯田村の大部分は湿地帯で覆われ、葦の生い茂る沼地を想像して下さい。最初に開墾されたのは「城佛土居屋敷」の丘陵地帯と思われます。日当たりに恵まれ、深堂川の疎水が流れ、山際に近いので堆肥にする落葉が多量に入手できます。又、裏山を背にしているので北風が凌げます。何より正面南方に曽場ヶ城が聳えているので戦略的にも意味深です。今坂峠、大山峠の関所とも考えられます。

慶長六年（一六〇二）の地詰によると六拾五町余り、高四百六拾石余りとなっていますので、百参拾年の間に急速に開発されています。この頃から開発最優先で遺跡類は悉く破壊廃棄されたことが容易に想像できます。

▼天野氏は伊豆国天野郷（現在の長岡市）から志芳庄（志和）に下向した鎌倉の御家人です。東天野、堀天野、志和西天野、その他と四家に分かれ、其々異なる運命を辿っています。

▼大内氏は六一一年、百済国滅亡前に聖徳太子（先祖は百済から渡来）に召喚され、周防国多々良浜に上陸し、太子に謁見を許され周防大内村を拝領したのが発端となっていますが、最近では創作ではないかと云われています。応仁の乱を期に将軍足利義稙を助け、従三位に叙せられ周防・安藝国守護大名に昇り詰めていきますが、華美に溺れ家臣の謀反により一族郎党自滅していきます

❷「平賀家文書二四三」
山口県文書館所蔵

安藝東西條所所知行注文
東西条所々飯田村百貫才満孫太郎、才満新右衛門知行
大永三年(一五二三)八月十日

【解説】大内氏城番・蔵田備中守房信が籠城していた鏡山城を尼子軍に包囲され、城内の身内の裏切りにより房信は切腹。その戦功として才満孫太郎・新右衛門父子は飯田村百貫を尼子氏（平賀家）から知行された。これは原文の一部ですが、原文では二十四の村々を主要武士が所領した内容が見られ、東西条は五千七十五貫余りでした。因みに寺町村八百貫、御薗宇村、寺家村、原村は三百貫となっていますので、飯田村は百貫の小村でした。この文章を根拠に飯田村に財満氏が居住していたとする説は早とちりです。飯田には痕跡一つ遺っていません。天野氏もこの時、原之村三百貫知行されていたので✦大永五年（一五二五）天野興定は米山城を大内氏配下の陶・毛利連合軍に包囲され、自決か麾下かの二者択一に迫られました。元就との起請文を交わし、更にこの後、義隆に太刀を献上し大内氏に麾下しました。

▼毛利氏は相模国森ノ庄（現在の厚木市）から吉田庄に下向した鎌倉御家人。

▼平賀氏は羽後国平鹿郡（現在の横手市）から高屋保に下向した鎌倉御家人。

❸「右田毛利家文書三九」
山口県文書館所蔵

大内義隆書状
財満備中守父子以下挿野心之処、被任隆宣・隆時申旨、既陣替之砌、即時被討捕之由注進到来候、誠感悦之至候、仍太刀一振盛高進之候、猶両人可申候、恐々謹言
十二月十二日 義隆（花押）
天野民部大輔（興定）殿

【書き下し文】現代語訳
財満備中守父子以下野心を差し挿むの処、隆宣・隆時申す旨に任され、既に陣替えの砌、即時討ち捕らるの由注進致し来候、誠に感悦の至りに候、仍って太刀一振り盛高これをまいらせ候、猶両人申すべく候、恐々謹言

【解説】天文八年（一五三九）大内氏東西条代官・杉隆宣と内藤隆時は財満父子が尼子方に陣替するので大内氏に麾下して間もない興定に誅罰を命じた。義隆はその褒賞として太刀一振りをまいらせた。これも年がありませんが、同じく花押で推定できます。

大内氏は尼子氏に奪われた鏡山城をその後、奪還し尼子氏に翻った者を軍事力と知行により味方に引き戻す剛柔の戦略を採りますが、戦力として使える者は生かし、その他の者は自分の手を煩わすことなく、麾下した家臣に誅罰させるのです。毛利が平賀、武田を、天野は財満を誅罰させています。次号はその戦況を時系列に沿って説明します。

（次号へ続く）

合同墓・墓地案内

有縁の皆さんでおまもりしている合同墓と一般墓地があります。たくさんのお方にご利用いただけます。

妙徳寺ホームページ
http://myotoku-ji.sakura.ne.jp/
「みょうとくチャンネル」もご覧ください

志和組テレホン法話「みのりの電話」

433−4989（しじゅうさんざん、しくはっく）

1月	1日～	妙徳寺	大江 了証
1月	11日～	浄蓮寺	沼田 典生
1月	21日～	報専坊	松島 典子
2月	1日～	善正寺	武田 昭峰
2月	11日～	寿福寺	田中 真
2月	21日～	天龍寺	天野 英昭
3月	1日～	報専坊	松島 純以
3月	11日～	照栄寺	井口 英隆
3月	21日～	長松寺	笠岡 潤一

志和、八本松川上地区の本派寺院13ヵ寺のテレホン法話です。3分程度のお話を24時間いつでもお聞きいただけます。ぜひ、電話でもお聴聞してください。

「写経の会」開催予定日

1月　28日(金) 午後2時より
2月　25日(金) 午後2時より
3月　25日(金) 午後2時より

申し込みは 代表_西本さん(428-2466)、または妙徳寺へご連絡下さい。

「妙徳寺仏教壮年会例会」（原則毎月第2土曜日）

1月　22日(土)　午後6時から定例会と懇親会
2月　12日(土)　午後6時より定例会
3月　12日(土)　午後6時より寺報編集会議

「生きていくための仏の教え 仏教基礎講座」

1月　29日(土) 午後2時より
2月　12日(土) 午後2時より
3月　12日(土) 午後2時より

申し込みは 代表_廣川さん(428-5935)、または妙徳寺へご連絡下さい。

「おみのりサロン」開催予定日

3月　20日(水)　午後2時より1時間半（『大乗』講読会と座談会など）

「書道教室」（金曜日、月3回、午後2時半～午後5時の間）

金谷雷聲先生(蕾門会)による幼児・児童・大人対象、硬筆・毛筆教室です。
申込は金谷先生のFAX0823-82-9565,または妙徳寺へご連絡ください。